

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町1-684)

TEL0428-23-6859)

武蔵御嶽神社銅鳥居かなどりいと石階段

武蔵御嶽神社にはいくつかの鳥居がありますが、頂上の神社へと続く石段の途中に建つものはとくに「銅鳥居かなどりい」と呼ばれます。名称から金属製であることがわかりますが、青銅製のこの鳥居は黒みがかった緑色をしています。朱色の鳥居と異なり目立ちませんが、朽ちずに長い間この場所に立ち、神域の存在を示しています。目を凝らして柱を見れば、表面に刻まれた文字を見つけることができます。

建立された安永九年は西暦1780年にあたります。鳥居の右側柱にある松平資承まつだいらすけつぐは当時、幕府の寺社奉行を務めていました。寺社奉行は寺社および僧侶・神職等や寺社領の領地領民を統括しつつ、旗本私領の訴訟を担当する役職でした。町奉行、勘定奉行とあわせ三奉行と呼ばれ将軍に直属しますが、三奉行の中で最上位にあたります。幕府の武運長久のために、建立の許可や助成があったことがうかがえます。

左側柱に建立者として刻まれている「大中臣朝臣郡胤」は、当時の御嶽山(御嶽権現社)の神主・金井郡胤かないくにたねでありました。この安永九年に高辻中納言家を執奏として「大宮司」の称を得ていました。

(右側柱 表面)

丹後宮津城主

松平伊豫守藤原資承(永)

爲武運長久令助力

(左側柱 表面)

當山大宮司大中臣朝臣郡胤建之

(右側柱 裏面)

安永九庚子年十一月吉日

※承・永の箇所には彫りなおした形跡があります



この銅鳥居は「新編武蔵風土記稿」に記述があります。

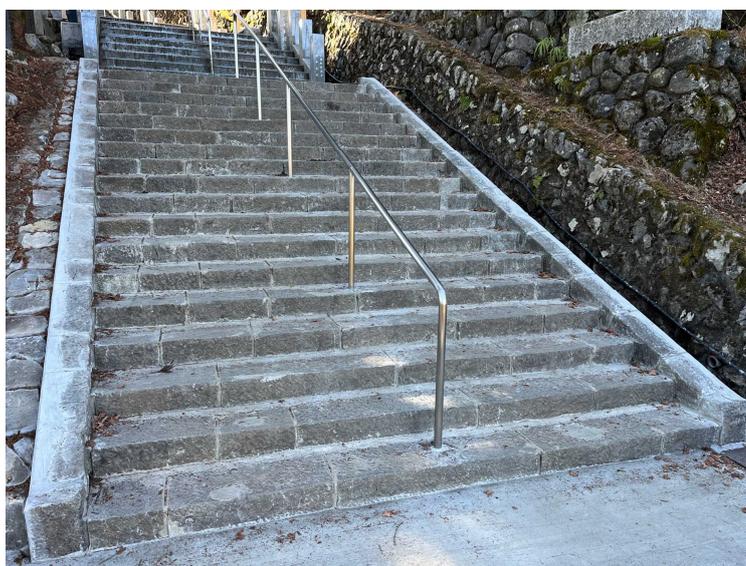
銅鳥居 楼門を入て正面にあり、高一丈二尺、両柱の間二間餘、武蔵國號社の扁額あり、これを三の鳥居と呼べり

現在、扁額は掲げられていませんが、大きさは当時とあまり変わりません。一の鳥居は石の鳥居で、市内御嶽と柚木との境にあります。二の鳥居は石階段の始まる鳥居前広場に立ち、神域から切り出された杉桧を材料としていて、大鳥居と呼ばれます。いま銅鳥居は三の鳥居とあまり呼ばれませんが、一、二、三と数が増える毎に目的地が近づくことを当時は知らせていたのでしょう。材質が異なる三つの鳥居が神域と俗界の境を知らせていました。

石階段は三百段の段数を超えます。武蔵御嶽神社は山頂に位置するため、四季や気候の変化により風や降水、温度変化等の自然現象の影響を大きく受けてきました。このため社殿や参道の整備は、古くから行われてきました。

石階段については、平成初期の頃より統一的な規格による新期の整備が行われていましたが、銅鳥居より上の区画18段分に関しては令和6年12月に整備され、この区画は史蹟としての歴史的な景観も重視するため、従来の石を再配置して使用しつつ、災害に備えて基礎の強度を増し、水勾配・排水が考慮されています。資材運搬すらも困難な難工事が施工され、これにより三十年以上の歳月を要した石段整備が竣工しました。

一つ一つ石段を登るとことにより確実に大神のもとに近づいていく、この想いを胸に御嶽詣の人々は今日も銅鳥居をくぐります。



(参考文献)

武蔵御嶽神社及び古文書調査団「武州御嶽山の史的研究」(2018)

(文責 黒田 耕)